

---

# 幼き窓

洸淋寺 凧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幼き窓

### 【Nコード】

N0554D

### 【作者名】

洸淋寺 凧

### 【あらすじ】

人は誰でも夢を見る。その夢は一つの窓を通して見ている風景。そして朝になり皆はその夢を忘れていく。ある日、僕はその夢の地にいた。はたして僕はどうなるのか!?

赤いカラスが空を舞い、緑の月が、歌を歌う。そして月はその歌を、途中でやめて踊りだす。それを見つけた青ネズミ、踊りに合わせて歌いだす。

「誰も私を見ているの　瞳の窓から　見ているの　そして夜は開け鐘が鳴り　みなは窓から遠ざかる　そして私を忘れてく　だけでもう一度覗けばね　誰でも私が見えるはず　夢というものを見るかぎり　みんな絶対ここを見る」

僕は正直眼を疑った。僕の前にはいつもと変わらぬ人々が居た。みんなは僕に全く話しかけてくれない。それどころか目の前に僕が居るっていうのにもかかわらずに僕を挟んだ後ろ側の奴と話をするのまで居る。みんなでみんな僕を無視するっていうのかい？ほら、現に今だって友達のトモ君が何か泣いているよ。いつもだったら真っ先に僕に相談するのにさあ……どうしてみんな無視するの？もしかして、みんな……僕が、見えてない？僕はそっと瞳を閉じた。

「やっと会えたね。僕はずっと待っていたんだ！君がここに来てくれるのを。でも、もう今日から君を待ち続けることは無いんだ。さっ！遊ぼう」

誰？そしてここはどこ？いや、ここには見覚えがあるぞ、いつもどこから覗いていた……

「ごめん、ごめんいきなりで困惑しちゃったかな？僕の名前はムーヅ。気軽にムーヅって呼んでね！それから……君はよくここを覗いてくれていたよね？」

僕は頷いた。

「やっぱり！でも、ここは君が立ち寄ってはいけない場所だった。

だから君はここを覗くだけだった。けど、もう今は立ち寄ってはいけない理由なんてもう無い！さ、この広いせきいでのびのびと遊ぼうよ」

僕はよく分からなかったが、とりあえずここの世界を歩いてみることにした。

「さ、遊ぼうよ」

何をして？

「そうだなあ……あ、君はゲームが好きかい？」  
もちろん大好きだ！ドラクエやFFなんかをよくやる。

「よし、じゃあ勇者ごっこをしよう！！」

勇者ごっこ？

「そう、いわゆるドラゴン退治！」

ドラゴン？ドラゴンがいるのか？

「そうだよ！でもここからはちょっと離れた所にあるんだ！」  
どうやって行くんだ？

「目を閉じて……さあ」

「そして空を飛んでいる自分を思い描くんだ」

僕はギュツと目をつむる。そして空を頭の中で描く。それから自分の姿。日頃からのアニメに洗脳された僕の頭では空を飛ぶのを描くなんてのは朝飯前だ。

すると、急に体が浮き上がるような感覚を感じた。

「目を開けないで！そのまま、ドラゴンを思い描いて！自分の装備も！」

今回僕は悩んでしまった。難しかったというわけでは無く、迷ってしまったのだ。「シンプルにまずは行ってみたら？」

「そうだね！」

だんだんムーヅに馴染めてきたようだ。

気づいたら僕は洞窟の前にいた。

「ここが君の思い描いたドラゴンのいる洞窟さ！」

「え？」

「ここは皆の創造で出来ているんだ！簡単に言えば自分の願いが叶うってことさ！」

「さ、剣を構えて！」

今、僕の目の前には緑色のドラゴンがいる。

「やあ

！！！」

僕は大きく剣を振りかぶる。

グサリ、鈍い音がしてドラゴンの腹部からは血が……出ていない。

「これはゲームと同じさ！グロテスクな描写は一切ない！遠慮せずにいけ！」

「了解！」

僕は回転切りを食らわした。

「ぐおおおお」

ドラゴンはいなりを聞かせながら突進してきた。

「必殺、聖剣サンダーブレイク！！」

とりあえずフィニッシュを決めるために漫画の必殺技名を叫んでみた。

すると、僕の剣は聖剣サンダーブレイクを放った！

「ぐぎやあああああああ！！」

ドラゴンは激しく叫び消滅した。

「楽しかった！」

「ゴメン……」

急にムーツが暗い顔をした。

「どうしたんだよ！」

「君をここに連れてきたのは間違いだったんだ！」

「僕をここに連れて来た？」

「それじゃ」

「え、まっ・・・」

段々と意識が朦朧としてきた。

「・・・きて！・・・起きて！」

どこからか皆の声が聞こえる。

「何？」

僕は目を開けた。

「・・・」

目を開けた場所は明るく、そこにムーズはいない。

後からわかったのだが、僕は川に落ちて瀕死の重体だったらしい。  
僕はあそこを忘れていった・・・

夜、眠りにつくと暗闇の中には窓がある。それは夢と現実を結ぶ  
門。

怖がらずに覗いてごらん！きっと損はしないから・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0554d/>

---

幼き窓

2011年1月13日02時27分発行